

## 巻 頭 言

### 教員養成の場を創る

武蔵大学教職課程委員長 武田 信子

私立大学教職課程は、戦後、開放制の理念の下で教員養成を行ってきた。

尊重すべき理念が、しかし、実態としては少々要領のいい学生であれば取れる教員免許、授業を受けなくても取れる単位の集合体による資格付与、の温床となってしまったことは、大層残念なことである（もちろん、本学をはじめ、多くの大学はそうではないよう努力を続けている）。大学を出るのだから免許位はという発想と入学者獲得の便法としての資格付与が結びつきもした。

それでも、大学が大学の機能を果たし、学問の府と胸を張って言えた頃はまだ、免許を取得し、教育現場に就職していった卒業生たちは、それなりに時期が来れば自分に必要な学びを身につけるだけの基礎的な力を持ち、実践を通して成長していったのだろう。しかし、教員採用の時点で「身元が安心」と親類縁者や出身大学のコネが通り、教員採用試験で必ずしも質の保証ができなかったことなど、さまざまな理由から「開放制の理念」が空転してしまった。また、現場では時に大学の教育学など実践には役立たないと揶揄され、一方で残念なことに一部の教育学者たちは、教員養成を変えようとするよりも、価値を一段低く見る風潮を育てた。

時代は変わり、今、自分の頭で考え、気働きよく段取りを考えるようなごく当たり前であった日々の生活が失われていき、学生の大学入学前の学びにおいて、点を取ることが至上命令のような教育がはびこり、最高学府であるはずの大学で学びや生活の基礎トレーニングをしなくてはならなくなった。今日、もし適当に免許を付与したならば、かつては伸びを見せることのできた一定数の新任教師たちでさえも、その後の成長が望めない事態となってきている。学校現場で先輩教師は日々の雑務に追われ、一人一人の子どもたちの発達課題と保護者との不協和音に悩まされ、安全管理が求められ、新任教員を育てる余裕をなくしている。学校は自然に人が育つ場ではなくなっているようだ。

しかし今もなお、自由な学びの場の保証に、大学教員たちの憧れは強い。学生たちの可能性にかけると言って、自らの授業と時代との齟齬という課題に真に取り組もうとせず、学生たちはおしゃべりや居眠りをしている。大学もまた教育現場だが、教員が十分な教育方法を身につけていないことも少なくない。

いま、大学の教員養成は変わらなくてはならない。あたらしい学びの場であたらしい人々を育てて行かなくてはならない。求められている学びの場を、学びの主体である学生たちと共に教員たちが新たに作らねばならないのだ。

まず、入学当初に、学びに希望を見いだすことのできる体験が必要だろう。学びが自分や社会や大学生生活を変えろという実感とそれに伴う喜び。自らの被教育体験・教育体験を振り返ると共に、学びの体験を掘り起こし、苦痛やお仕着せや抑圧ではない学びがあるということを感じること。他人の文章を読み解き、意見を聞いて、自分の頭で考え抜くという時間のかかる作業への取り組み。世界の様々な事象から、現在の自分を客観視する視点の獲得。何よりも皆が自ら学ぶことをあらためて「選択」してほしいと思う。

学びが自由の獲得を意味すると明確に見えている途上国では、人々は一心不乱に学びに向かう。しかし一方で、自由が既に手の内にあると思こんでいる日本の学生たちはむしろ、既成の価値観に対してあらがうことのできない自分に見切りをつけ、学ぶことも退くこともできずに、黙って立ちつくしている。

そうして入学してきた学生たちに、大学の学問に希望を見いだし、自らの手で学びによる自由を再度獲得する体験を与えることが必要だろう。知の喜びに震え、問いを立て、自己を表現し、社会と相互交流する機会を与えなくてはならない。

さらに、開放制の特徴である専門教育の力をどう現在の大学で保証していくのかという問いに対して、専科の教育も含めた大学全体のあり方の問い直しが必要であろう。そこに影響を与えていくだけの力を、大学教員養成の担当者たちが持っていないとてはならない。またもちろん、教職に関する科目が、どう現在の教育に役立てていくことができるのか、より現場の当事者を尊重した教育学が発展していかなくてはならない。

どんな時代にも、あきらめない希望の光が見えていた人たちはいた。何千年も前から、絶望の淵にいた人々は、常に光を見いだしていた。学問は常に先を照らしていた。教員養成をそのような学問の場とすることが果たしてできるのか？

われわれ自身の教育が問われている。